

原著論文

「人間関係（指導法）」に関する一考察 ～異年齢保育の事例から～

A Study on Human Relationships (Teaching Methods): A Case Study of Multi-age Childcare

小倉 庸寛・設楽 紗英子・矢野 善教
Tsunehiro Ogura, Sacko Shitara, Yoshinori Yano

【要約】

本研究の目的は、保育者の支援との関わりから、どのように子どもたちの行動および内面の変化が生じているかを検討するものであった。私立幼稚園の異年齢保育で行う園内行事「お店屋さんごっこ」を題材に実施した園内研修から4つの場面を取り上げ、分析した。その結果、保育者は個々の発達的特徴を考慮しつつ、見守る関わりと環境設定、望ましい行動への声かけによる焦点化などによって、異年齢の子どもの相互作用を活発化し、助け合いや教え合いなど様々な人間関係を促進していることがわかった。今後は、保育者養成校において異年齢保育での関わり方や環境設定の方法などを学ぶ機会を設ける必要がある。

【キーワード】

異年齢保育、保育者の関わり、ごっこ遊び、人間関係

I. 問題と目的

少子化が進む現在の社会において、保育・教育施設が子どもたちの社会生活に果たす役割は益々大きくなっている。2005年（平成17年）に中央教育審議会から出された「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）」では、幼稚園等施設においてはこれまでの役割に加え、「失われた育ちの機会」¹⁾を補完する役割、「幼児教育の牽引力」として家庭や地域社会を支援する役割を担うことを求めている。無藤・古賀（2016）も、領域「人間関係」においては、特に人と関わる機会の減少という量の問題と豊かな人間関係を涵養する環境という質の問題の両方が深刻化しつつある中、乳幼児期の教育が担う役割は大きくなっていると指摘している。

少子化の問題は保育形態にも影響を及ぼしており、保育規模の縮小化から、年齢別保育の実施が困難になり、止むを得ず異年齢保育を導入する場合（坪井・山口、2005）が見られるようになっている。宮里（2014）は、異年齢であることを実践の基本に置きながら、その形態に積極的な価値を置いた保育を「理念的異年齢保育」と地域等の実態から否応なく異年齢であることを受容する保育を「条件的異年齢保育」に分類している。これまで、子どもたちの社会性を育てる保育は、年齢別に発達的特徴を考慮しながら行うことが基本的な形であった（坪井、2017）。しかしながら、今後は、発達段階の異なる異年齢集団に対して、個々の発達的特徴を踏まえながら個と集団に対する効果的な人間関係の指導法のあり方に積極的になる必要があると考える。もっとも、異年齢の子ども集団は、家庭保育

など、日常生活を考えれば特別なことではなく、ただ、例えば、保育者養成課程で 사용되는教科書²⁾には特段解説項目が設けられているものでもなく、少なくとも新人保育者にとっては既習のことでも当たり前の保育スキルでもないのである（坪井、2017）。保育における人間関係の質と量の充実を図るのであれば、保育者養成の段階で、個々の発達を考慮した保育支援だけでなく、異年齢保育など、子どもたちの多様な人間関係への支援についても学ぶ機会が必要であろう。しかしながら、異年齢保育に関する先行研究は、保育形態や発達の特徴に関しては散見されるものの、保育者の指導法に関しては見られない（三宅、2021）。

異年齢保育では様々な年齢の子ども同士の相互作用が見られる。幼稚園教育要領（文部科学省、2018）の領域「人間関係」によれば、幼児教育における人間関係のねらいは、「自分の力で行動すること」であり、このために保育者は重要な役割を果たす。永野（2021）は、「自分の力で行動すること」について、「自分に自信を持つこと、つまり自己肯定感の醸成を主眼とした幼児との関わりが重要」と述べており、子どもの内面（自己肯定感）が成長することにより、自発的な行動が生起すると指摘している。保育の場で子どもは、保育者の働きかけ（子どもによる選択や自発性の促し等）により、新たな学習に関連した物事に向けて興味や関心が引き出され、行動を通して自己有能感（手応え）をもたらし、それが更なる自発的な行動へと結びついていく（速水、1998）。異年齢保育では、従来の幼稚園教育要領などが念頭に置いてきた、発達段階が（概ね）同一である集団に対して、（概ね）同じような発達の見方に基づいた援助とは異なり、異なる発達段階にある子ども達の育ちの特徴を有機的に結びつけていく援助が求められる。そこでは、子どもの内面と行動の変化が、保育者のどのような援助と関連しているのか、実態を基に、検討することが必要である。

以上より、本研究では、関東地方のA幼稚園が例年園内行事として異年齢保育で行っている「お店屋さんごっこ」に着目し、異年齢の子ども同士の相互作用に対する保育者のどのような支援が、子どもたちの人間関係の学びに影響を及ぼすのか、探索的に検討することを目的とする。

II. 方法

1. 対象者と対象場面

関東地方のA幼稚園でお店屋さんごっこ実施後に行われた園内研修を分析対象とした。この研修には、お店屋さんごっこを担当した保育者8名（女性）、第1著者1名（男性）の9名（平均年齢32.3歳（23-60）、常勤7名、非常勤2名）が参加した。

2. 園内行事「お店屋さんごっこ」の実施内容

ごっこ遊びは、「子どもが日常生活の中で経験したことを模倣して現実の遊びで再現したり、また現実の物・人・事をイメージしたりして象徴的に遊ぶことを包括した遊び」（土谷、2019）であり、異年齢の子ども同士でも遊びが成立する（古野・飯塚、2019）子どもの育ちを全般的に促すことが可能な遊びである。

2021年の11月に行われた「お店屋さんごっこ」は、「子どもの意欲を大切にすること」

を教育上のテーマに掲げ、異年齢保育として、年少児（53名（3クラス））、年中児（46名（2クラス））、年長児（69名（3クラス））が、年長児が考えた7店に分かれ行われた。ねらいと経過を表1と表2に示した。準備に約1ヶ月をかけ、本番は1日であった。

表1 「お店屋さんごっこ」のねらい

【全体】	
<ul style="list-style-type: none"> ・目的をもって異年齢で活動することで、仲間意識をもち、協同性を育む。 ・イメージを模倣することで思考力の芽生えにつなげる。 ・地域のお店に関心を持ち、店としての売り手と買い手の関係に気づく。 ・様々な素材に触れる。作ることを楽しむことで豊かな感性と表現力を養う。 ・自分の意見を言う、他の意見を聞く、話し合う経験ができるようになる。 	
【お店屋さんの種類】	
(ア) ドライブマック、(イ) スイーツカフェ、(ウ) スーパー、(エ) どうぶつペット、(オ) 駄菓子屋、(カ) おしゃれ屋さん、(キ) おもちゃゲーム	
11月2日	保育者が今年度のねらいと実施計画の立案を行なった。
11月4日～5日	年長児が話し合い、お店は7店（ドライブマック、スイーツカフェ、スーパー、どうぶつペット、駄菓子屋、おしゃれ屋さん、おもちゃゲーム）とした。各自、自分のやりたいお店を1店舗選び、準備を開始した。 保育者は、店舗ごとに2～3名が担当し、メインとサブに役割分担した。
11月9日	年少、年中児が、年長児の各お店のプレゼンテーションを聞き、やりたいお店を決めた。
11月10日	年長児が簡単な商品の見本を作って年少児の部屋に行き、準備について説明した。
11月12日	商品を考え、制作した。お店屋さんについて理解を深めるため、全ての店舗が地域のお店を見学した。
11月29日	プレオープン。園長が園児に売買用のお金を配布し、園児はそのお金で何を買うか各店舗を下見した。お店ごとに売買を練習し、お客さんの流れを考え、動線を考えた。
11月30日	オープン。1店舗を2班に分け、買物担当とお店担当の交替制とした。

3. データの収集方法

本研究では、園内研修に着目し、異年齢保育における保育者の関わりの実態についてデータを収集した。「幼稚園教育要領解説」（文部科学省、2018）によれば、園内研修は、指導の反省や評価を適切に行うために「他の教師などに保育や記録を見てもらい、それに基づいて話し合うこと」、「お互いの指導事例を持ち寄り、話し合うなどの園内研修の充実を図ること」である。これに関しては、「保育所保育指針 第5章（4）」（厚生労働省、2018）や「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」（内閣府・文部科学省・厚生労働省、2018）にも同様の条文がある。園内研修では、保育者の子どもへの関わり方の特徴の捉え直し（田中・榊田・吉岡・伊集院・上坂元・高・尾形・田中、1996）、見方や考え方、保育観の修正（若林・杉村、2005）、暗黙の認識（木全、2008）の再構築等の機会となる。園内研修

を対象としてデータ収集を行うことで、子どもの相互作用と保育者の援助のどこにどのように着目し、振り返りを行っているか、個々の保育者および園全体の視点として知ることが可能となる。

本研究が対象とする園内研修は、お店屋さんごっこから12月13日の間に実施された。参加者は、お店屋さんごっこを担当した保育者8名に加え、第1著者の計9名であった。園内研修は、「子どもの意欲を大切にすること」を目的として実施したお店屋さんごっこについて、①個々の育ちの見方、②保育者間の共通理解と情報共有の2点を目的に行われた。1クール（約30分間）に2つから3つのお店が順番に、保育者が撮影しておいた当日の様子を画像をタブレットで他の参加者と共有しながら、概要と振り返りを発表し、他の参加者と意見交換を行った。5分の休憩を挟みながら、全部で3クール行った。発表の際、担当保育者は「保育者の子どもへの関わり」と「子どもの変化」について特に振り返りを述べた。この研修は、第1著者が参与観察し、筆記記録を取った。

4. 倫理的配慮

本園では、入園時に事例研究協力に関して保護者に口頭と文書による説明を実施している。また、保育者および子どもの表記は個人が特定されないように、一部変更を加えた。

Ⅲ. 結果と考察

本研究では、以下の4つの場面を特に事例として取り上げ、保育者の関わりが子どもたちの行動や内面にどのように影響したかを考察した。

(1) 事例1（ドライブマックメイン…T教諭（経験5年）、サブ…K教諭（経験17年）

【場面】O児（5歳女児）が、ハサミ使用している様子を見たA児（3歳女児）は「私もやりたい!」と言い出した。T教諭は「危ないから後でね」とA児に声をかけたが、A児はO児の隣で不満そうな顔を浮かべていた。ちょうどT教諭はI児（3歳男児）をトイレに連れて行くために、部屋から離れた、その間にA児は手で紙を千切ってポテトを作り始めた。それを見たT教諭は「おー、すごいね!」と声を掛け、O児に「手伝えてあげて」と伝えた。

【保育者の振り返り】

- ① T教諭の振り返り A児の手先の不器用さを知っていたので、ハサミで指を切ってしまうことが怖かった。A児はハサミを使いたくて、ウズウズしている様子が見られたので、手が空いたら関わってあげようと思っていたが、I児のトイレ援助に注意が向き、A児の援助が後回しになってしまった。
- ② K教諭の振り返り T先生がA児に「後でね」と行った後の（A児の）表情を見ていたので、（A児にハサミで紙を切る作業を）やらせてあげたい気持ちになった。（A児の）意欲が見えているのに、手を貸してあげられないことはむず痒い。（A児のハサミの使用について）T先生とコミュニケーションを密に取ることが重要だと感じた。（T先生は）I児のトイレを気にしているけれど、（I児へのトイレのサポートは）それほど必要ないのではないかと感じた。手を貸す子と放っておいても良い子が逆だったのではないか。

【考察】

T教諭がA児を「制止」したアプローチは、子どもに対する関わり方が一知半解であるようにも考えられるが、実は、保育の場では、少なくとも保育者が経験することではない

だろうか。子どもの成長を願う気持ちがありながらも、まだトイレに心配がある子への援助を優先する、年長児の姿から意欲が高まったのに、ケガの危険性が高い、あるいは、うまくいかず活動全体の進行を妨げる可能性のある行為（A 児がハサミを使うこと）を抑制してしまうといったことは、どちらかという保育者の都合に立った判断であり、子どもの気持ちの流れに沿った保育とは言い難い。こうしたことは、特に、経験年数の浅い保育者にはよくみられることだろう。しかしながら、T 教諭は、A 児の気持ちを後回しにしてしまったことに気づいており、ベテランの K 教諭も、そんな T 教諭の反省を支持していた。そして、T 教諭の制止があったものの、A 児は自ら問題解決をしている様子が見えた。3 歳では自分の行動や体験を通じた現実的で具体的な範囲であれば、「こうするとこうなる」など、あらかじめ結果について予想することができるようになってきている。A 児は、年長児である O 児の姿から紙を切るということに興味を持ち、保育者にハサミの使用は制止されたものの、保育者の援助は待たずに自分なりに工夫をした。そして、保育者は、その A 児の行動を否定せず、大きく肯定し、周囲の子ども（O 児）も巻き込み、A 児の行動を支持した。保育者による「関わらないという関わり」がこのような結果を導き出した部分もあるのではないだろうか。異年齢保育では、低年齢児が、年長児の姿から、普段、保育者が予想、設定する範囲を超えたレベルの活動に興味を持ち、挑戦したくなることは十分にあり得るだろう。そして、事例 1 では、それを制止されてもなお、自分なりの方法で、年長児のやることに近づこうとする姿が見取れた。その部分をうまくカバーする保育者の、また、保育者同士の連携を考えておく必要があるだろう。



図 1 事例 1 の様子

(2) 事例 2 (おしゃれ屋さん メイン M 教諭…経験 10 年、サブ K 教諭…経験 1 年)

【場面】 Y 児（4 歳女児）は、初めてのスカート作りに苦労していた。保育者が見本を提示した後、積極的に保育者に質問し、見本を基に K 教諭と一緒にスカートを作り始めた。すると、A 児（5 歳女児）が「私も手伝う」と言い、3 人で取り組むことになった。そして、頃合いを見て、K 教諭は声を掛けずにその場から離れたが、2 人はスカートを完成させていった。2 人の言葉のやり取りは必要以上に無かったが、A 児が Y 児にそっと手を貸してあげる姿が見られた。

【保育者の振り返り】

- ① M 教諭の振り返り Y 児は年中さんだし自分でなんとかできると思っていたが、K 先生の見本がわかりやすく、意欲につながっていたと感じる。また、思いもよらず A 児が関わってくれたことはうれしかった。
- ② K 教諭の振り返り 私が Y 児を誘いスカート作りに取り組んだ。Y 児は思いのほか素直に話を聞き入れてくれて、嬉しかったことと、A 児が興味をもって手伝ってくれたことはもっと嬉しかった。私の気持ちに伝えてくれたように感じた。

【考察】

保育者は、スカート作りに苦労していた Y 児に対して、見本を提示し、Y 児の意欲を向上させていた。A 児も K 教諭が見本を見せたスカート作りに興味を持ち、もしかした

ら、自分でももっと作ってみたかったのかもしれない。Y児とA児の相互作用は必要以上に見られなかったということだが、A児は、スカート作りはY児が始めたことであることを尊重していたとも考えられるだろう。また、Y児が意欲的にスカート作成に向かっていることと、A児が自発的に手伝っていることは、保育者の関わりが影響しているだろう。Y児（4歳）は、わかりやすい見本によりスカート作りに理解が促され、質問行動など、自発的行動につながった。K教諭を手本にしながら、Y児のやる気に添うよう勤めていたのかもしれない。異年齢保育では、年長児に先に仕掛ける場合と、低年齢児に先に仕掛ける場合とで異なる展開が予想される。事例2では、低年齢児の方に活動を仕掛けた保育者の環境設定（見本の提示）とそこからのフェードアウトが、Y児のスカート作りと、異年齢児同士の協働を持続させていたと考えられる。



図2 事例2の様子

(3) 事例3（どうぶつペット メインI教諭…経験15年、サブO教諭…経験7年）

【場面】販売するペットのイメージが膨らんでいるK児（6歳男児）は、C児（3歳女児）に「何が作りたい？」と何度も問い掛け、「じゃあ、一緒に作ろうね！」と言っていたが、それぞれ作りたい生き物が合わないことがわかると、C児に全く興味を示さなくなった。しかし、C児の金魚が形になると、K児が興味をもち、急に関わるようになった。K児も次から次へとアイデアが浮かび、楽しそうに金魚を作り、完成させることに満足している様子だった。

【保育者の振り返り】

① I教諭の振り返り K児は、年少さんとの関わりに心配がある子だった。できる限り自然に年少さんの面倒を見ることできるように声掛けをしていた。はじめは、K児がC児にどんどん声を掛けてくれるので良い感じかなと思ったが、次第に考えが合わなくなると、2人の関係は上手くいかなくなり、仕舞いにはK児は私の声も聞き入れてくれなくなった。しかし、2人の席を近くにしたり、興味を引くような材料を近くに置いたりするなどして、見守ることにした。K児の発想はとても面白いのでC児の方をくっつけようとしたけれど、C児もマイペースなので繋がりには難しかった。それが金魚作りをきっかけに、2人が一緒に作り始めた時は嬉しかった。

※ O教諭はパート勤務のため、振り返りに参加せず、朝の打ち合わせのみ参加した。

【考察】

保育者は、はじめ、K児とC児の相互作用が生起するように言語的に直接的に働き掛けたが、関係が発展するようにはうまくいかなかった。K児（6歳）にはC児を仲間と捉えて関わろうとする意欲が見られたが、自分の関心に合わせるよう仕向けようとする関わり方が目立った。そして、C児まだ3歳で個別の発達の特徴もあり、相手に合わせて柔軟に発想を変えることが難しく、K児とC児の相互作用はなかなか歩調が合わなかった。そこで保育者は、K児とC児の相互作用の生起に向けて、自然に同じものに興味を引き、協働作業が発生しやすくなるような物理的な環境設定の変更を試みるとともに、他者のことばをなかなか聞き入れない子どもの性格も考慮し、見守りに徹することに方針転換し

た。その結果、いつしか2人の興味が一致し、協働作業が発展することとなり、K児も自身の意欲が肯定されたのみならず、K児なりに年少児の面倒を見るという、保育者のねらいも達成されたとも言える。2人の相互作用の開始までには、(見守る保育者から見れば)いくつものすれ違いがあり、保育者の巧妙なきっかけ作り無くしては、向き合うことがないまま終わったかもしれない。保育者が不必要に積極的な介入を行わずとも、幼児に特徴的な相互作用の始点となる環境づくりに心を尽くすことで、限られた保育時間の中で、子どもが「自発的に」協働作業を開始することが可能になったと考える。



図3 事例3の様子

(4) 事例4 (スーパー メインY教諭…経験9年、サブJ教諭…経験30年)

【場面】子どもたちが地域のスーパーを現場見学した際、保育者が「皆、お店の人に質問して良いですよ」と伝え、G児(6歳男児)は積極的に店長に質問し、レジの中に入り、バーコードを読み取る機械も触らせてもらった。また、G児は店員の名札に興味を持ち、保育者に何度も写真を撮って欲しいと頼んでいた。G児は見学終了時、「俺、明日もお母さんで行く」と発言していた。また、帰園後の作業では、率先して作るモノを口にしていた。Y教諭は、G児の様子を見て、「皆、G児に付いていこう」とクラスを促した。

【保育者の振り返り】

- ① Y教諭の振り返り G児は知りたいことがたくさんあったので、とにかく質問していた。スーパーの店長に憧れを抱き、それが作ることへの意欲に繋がっていたと思う。G児が「名札を作ろう」「エプロンを作ろう」など、作りたいモノを言ってくれるので、年中児や年少児も何を作るのかイメージがし易くなり、スーパーに興味を持つことができたと思う。G児のリーダーシップの良さを感じた。
- ② J教諭の振り返り G児が「皆が使う物は皆で作ろう」と言うのには驚いた。その時は自分だけが作るの嫌なのかなと思ったが、振り返ってみると年中児や年少児のことも考えた言動だったのかなと思う。

※J教諭はパートのため振り返りに参加しなかったが、コメントを記載する。

【考察】

保育者は園外活動を設定し、実際の現場に触れる機会を設けていた。G児(6歳)は現場見学で知識欲が刺激され、店員に積極的に質問する様子が見られた。また、帰園後の作業では、店内見学において得た知識や経験を基に自分はこんなことができるという自信とこうやればもっと面白いに違いないという予想や見通しを立てることができた。保育者には初め、現場見学の後のG児の姿は、G児が自分の夢と理想に向かって突っ走り、周囲を思うように動かそうとコントロールするミニティーチャーように感じられていた。一方で、保育者は年少・年中児に対して、G児の行動をモデルとして見るように指示しており、

G児の意欲と、お店屋さんに向けたグループ全体の盛り上がりの火を消すようなことはしなかった。むしろ、G児が次々に出すアイデアを支持している。どんなものを作ると良いのか、お店屋さんごっこは、他の人の話も聞きながらみんなで完成させるものである、年長児は年少児も楽しめるように進めなければいけないなどのコンセプトが、G児にはなんらかの形で理解されていたのかもしれない。5歳児は、活動の意図や目的を理解した上で、他者への配慮や協力を伴う具体的な行動を起こすことができるということだろう。そして、そうした意図を持ったG児の行動は、年少・年中児の共感や関心を引き、メンバー全体の意欲の向上に繋がったろう。年少・年中児にとっても、身近な存在である年長児の強力なリーダーシップは、大きな学びの機会になったと考える。



図4 事例4の様子

IV. 総合考察

本研究では、異年齢保育における保育者の指導法を検討するために、A幼稚園が園行事として例年行なっている異年齢保育による「お店屋さんごっこ」と園内研修に着目し、保育者の関わりが子どもの行動や内面にどのように影響したのかを検討した。

異年齢保育における子ども同士の相互作用と保育者の援助については、4つの事例から、以下のような特徴を指摘することができる。まず、年長児は年少・年中児の興味関心を高め、行動の見通しを与えるモデル、そして、ガイドとして、目標の遂行の助けになっているということである。宮里（2013）は、異年齢保育は、年長児のようにできない小さな子も加わっており、「できる・できない」の競争意識よりも「できなくても大丈夫」という雰囲気醸し出され、これが活動に対する安心感を生み、子どものやってみようという動機づけや意欲に繋がっていると指摘しているが、本研究の結果は、これを裏づける知見であると考えられる。そして、このことに対し、保育者の方でも、①異年齢児同士の興味関心を結びつける環境づくりを工夫することにより相互作用を起こして人間関係を学ぶ場づくりをし、②自発的行動を支持する見守りに留意しながら、全ての子どもにやりたいことが達成できる手応えの機会を設け、さらに③それを他児と共有できるよう援助することで、年長児にはリーダーシップに自信を与え、年少・年中児にも学習の足場かけを行っていたと考える。本研究からは、子どもたちに集団における年齢に応じてそれなりの役割を学び合わせつつ、全ての子どもにとって、人間関係を通して、自己肯定感が高まる保育者の指導が行われていたと考える。

本研究で得られた知見からは、異年齢保育を展開するためには、①個々の子どもが役割や居場所としての安心感を得られる配慮と、②活動への興味や動機づけの維持を意識した保育者の関わりが必要であると言える。保育者は発達段階に開きのある個々の子どもの発達の様子や興味関心の方向を理解し、重ね合わせる役割が求められる。また、保育者は声かけの仕方やタイミング、見守り方、環境設定の方法など保育技術を駆使しながら、多方

面の関わりを展開する必要がある。

最後に本研究の限界と今後の課題として、主に以下の3点を挙げる。まず、本研究の分析データは、園内研修における保育者の想起を基にした振り返りであるため、子ども同士の相互作用や保育者の援助については、保育者の理解を反映しているものの、バイアスがかかっている可能性は否めない。また、詳細な子どもへの関わりを知るには限界があった。これらの点は、保育者養成課程における領域「人間関係」の学修にどのように反映させていくにも関係してくるため、今後、データ収集の方法を見直し、より具体的な援助方法を検討していく必要があるだろう。2点目に、本研究の4事例では、年長児の年中児・年少児への関わりとして、面倒を見るといった側面に焦点が当たることが強かったように思われる。特に、年長児の発達保障を考えると、面倒を見るお兄さん・お姉さんという役割イメージの固定化は避けるべきだろう。固定化された役割期待は、ややもすると、自己肯定感が無視されることになりかねない（馬場・守屋・井川・古埜・白神・平松・高橋・高橋、2018）。年長児と低年齢児の多様な相互作用の場面を検討し、子どもたちの人間関係における「自分でできる力」について、柔軟に考えていくべきだろう。3点目に、本研究で取り上げた異年齢保育は、園内行事という設定保育であり、子どもたちは構成的な環境の中で非日常的な（保育）活動を行った。保育者が誘導的に保育を展開している側面が強く、保育としては、子どもが自発的に始めている活動とはあまり言えない。今後は、日常場面での異年齢保育と保育者の援助についてもさらに検討していくべきだろう。そのためには、子どもの自発性をより重視した、河邊・田代（2020）が定義している「子どもに経験しておいてほしいことを押さえる計画」の中での異年齢保育について、検討していくことが必要である。

注

- 1) 「失われた育ちの機会」とは、「家庭や地域社会における教育力を補完する役割」のことである。
- 2) 横山真貴子（2021）『子どもと保育者がつくる 人間関係―「わたし」から「わたしたち」へ―』教育情報出版

文献

- 馬場訓子・守屋操・井山房子・古埜弘子・白神繁子・平松由美子・高橋慧・高橋敏之（2018）『幼稚園教育におけるティーム保育の多様な形態に見る望ましい運営方法』くらしき作陽大学・作陽音楽短期大学研究紀要, 51(1), 1-17.
- 中央教育審議会（2005）『子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）』中央教育審議会.
- 古野誠生・飯塚恭一郎（2019）『異年齢クラスにおける遊び集団の変化の過程に関する研究ノート：3歳児の人間関係に着目して』純真紀要, (59), 35-48.
- 速水敏彦（1998）『自己形成の心理学』金子書房.
- 河邊貴子・田代幸代（2020）『遊びが育つ保育～ごっこ遊びを通して考える～』フレーベル館.
- 木全晃子（2008）『実践者による保育カンファレンスの再考―保育カンファレンスの位置づけと共に深まる実践者の省察―』人間文化創成科学論叢, 11, 277-287.
- 厚生労働省（2018）『保育所保育指針』厚生労働省.

- 三宅英典（2021）『わが国の異年齢保育における発達の保障を取り巻く研究動向と展望』金城学院大学論集・人文科学編，18(1)，118-128.
- 宮里六郎（2013）『異年齢保育から保育を問い返す』現代と保育，86，48-64.
- 宮里六郎（2014）『「子どもを真ん中に」を疑う：これからの保育と子ども家庭福祉』かもがわ出版.
- 文部科学省（2018）『幼稚園教育要領』文部科学省.
- 無藤隆・古賀松香（2016）『社会情動的スキルを育む「保育内容 人間関係』北大路書房.
- 永野典詞（2021）『幼稚園教諭の養成課程における「人間関係」の指導法の考察』紀要 visio，52，41-48.
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2018）『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』内閣府・文部科学省・厚生労働省.
- 田中三保子・榊田正子・吉岡晶子・伊集院理子・上坂元絵里・高橋陽子・尾形節子・田中都慈子（1996）『保育カンファレンスの検討－第1部現場の立場から考える－』保育学研究，34(1)，29-34.
- 坪井敏純（2017）『保育内容「人間関係」における異年齢保育の取扱いと今後の課題』鹿児島女子短期大学紀要，53，43-52.
- 坪井敏純・山口郁（2005）『異年齢保育の中の子どもたち』鹿児島女子短期大学附属南九州地域化学研究所報，21，1-10.
- 土谷みち子（2019）『ごっこ遊び』. 谷田貝公昭『改訂新版保育用語辞典』一藝社，p.146-147.
- 若林紀乃・杉村伸一郎（2005）『保育カンファレンスにおける知の再構築』広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 教育人間科学関連領域，(54)，369-378.